

# 国語の教科書がもつ家族情報の分析(1)

—1989年と1993年度版における家族の属性—

大 瀧 ミ ド リ\*

(平成7年10月31日受理)

## 要 旨

差別撤廃条約の批准後に改正された学習指導要領に基づいて作成された小学校の国語の教科書(1993)とそれ以前の教科書(1989)に描かれている家族情報について、家族の属性および家族の生活に関する情報について①家族構成の多様性、②家族の生活が描かれている時代、③家族の生活(健康状態、家族の中の誕生と死、生活水準と生活時間)について分析を行い、以下の結果を得た。

1. 1993年度版では、1989年度版より母親登場率は有意に減少し、祖父母の登場率は有意な増加を示すものの、依然として母親重視の傾向が顕著に認められる。
2. 家族構成の類型は、1993年度版の方が1989年度版より多様化しており、母親と子ども家庭の出現度は有意な減少を示している。
3. 題材の作者における性差は、1993年度版の方で減少する傾向が見られる。
4. いずれの年度の教科書も、家族の経済的側面に関する記述はニュートラルで、生活臭の無い家族の生活が描かれている。

## KEY WORDS

小学校	elementary school	家族の属性	family attribute
国語の教科書	Japanese textbook	家族情報	family information

## 1 はじめに

記載事項に「間違いはない」の大前提のもとに、教科書は教材として中心的役割を担わされている。そのため、編集過程において当該教科の視点から記載事項の正誤について厳重にチェックする体制がとられている。しかし、現代社会で男性と女性が分担している役割をそのまま写しとった記述や挿絵が、男性や女性にステレオタイプの生き方を固定したり、助長する情報となるとの指摘があるにもかかわらず、男女平等の視点から教科書の記述内容が十分にチェックされるということがないままに、子どもの手元に届けられている実情がある。つまり、男女平等の視点に立った教科書をつくる必要性が、編集過程において必ずしも十分に認識されていない実情がある。教科書に描かれる男女の姿が、性別役割を固定化したり、性差別を助長する情報であるとの指摘が活発になされるようになったのは、日本では1970年代後半に入ってからで

---

\* 生活・健康系教育講座

ある<sup>1,2,3,4)</sup>。この活動の背景には、国連レベルでの人権保障への関心の高まりがある。国連が、1975年を国際婦人年として、「平等・発展・平和」をかかげ、人権の視点から「世界行動計画」を採択し、その実施状況を点検し、さらに、1979年の第34回国連総会では「女子に対するあらゆる形態の差別撤廃条約（通称「差別撤廃条約」）」を採択している。日本も1980年には「差別撤廃条約」に署名するなど、国の内外において人権の視点から性別役割分担などの見直しが行われている。このような社会的状況の変化に合わせて、男女平等を確立する視点から教科書の内容について活発な問題指摘がされたにもかかわらず、その後、約10年間が経過しても教科書の記述に見るべき改善がなされていないことを大瀧<sup>5)</sup>と伊東<sup>6)</sup>は明らかにしている。つまり、問題指摘がされて約10年経過した1989年度版の教科書の記述内容について「家族情報」「性別役割」「女らしさ・男らしさ」などに関する視点から分析した結果は、1970年後半に指摘されたものと実質的に同じ問題をもっていることが明らかにされている。男女平等の視点から問題が指摘されて以来、長い時間が経過しても教科書の記述内容に見るべき改善が認められなかった理由として、まず、教科書の性差別的記述の問題が指摘された頃の教科書と大瀧<sup>7)</sup>や伊東<sup>8)</sup>が教科書分析に使用した1989年度版の教科書は、いずれも1977年（昭和52年）改正の学習指導要領に基づいて作成されたものであり、この学習指導要領には人権的視点が明確にされていないことが指摘できる。他の理由としては、教科書のづくり手である編集者や出版社側の人権意識の稀薄さが指摘できる。教科書における差別的記述が指摘された時の編集者や出版社側の反応は非常に不明確であり、オープンな議論の場に参加することがほとんど無いことへの批判がある。例えば、小学校の国語の教科書に掲載されていた「どろんこ祭り<sup>9)</sup>」は、性別役割を固定し、「らしさ」を強調する作品であるとの批判が強かったにも拘わらず、1993年度版で削除されるまでの15年間にわたって掲載され続けた作品である。削除に関して作者である今江祥智のコメント<sup>10)</sup>はあるが、削除に関する編集者や出版社側のコメントは全く公にされていない<sup>11)</sup>。作者が作品に対する責任を問われることは当然である。しかし、教科書への掲載を決定する権限は作者ではなく、編集者や出版社がもっており、当然、掲載の責任は出版社にある筈である。その責任をもつ編集者や出版社が「削除」について黙秘し続けることに対して、伊東<sup>12)</sup>は「問題が多い作品」であり、「無くした方がいいと思っていたが……なくせばいいというだけの議論ではない」として、オープンな議論の必要性を指摘している。教科書の記述に関して指摘される問題は、単に個々の作品を削除すれば解決するというのではなく、編集者や出版社の姿勢を含む教科書全体の問題として、性差別的記述の問題をとらえる必要がある。教科書の記述等の問題が指摘された時に、編集者や出版社が自らの見解を表明しない無責任な態度は、高等学校の国語の教科書に掲載された「無人警察」の削除過程においても認められるものである<sup>13,14)</sup>。教科書を男女平等の視点から分析する場合、教科書のづくり手を議論の場にいかにか引き出すかは非常に大きい問題である。しかし、国語の教科書ではないが、筆者が編集者の1人になっている一橋出版では、明確に「差別撤廃」を教科書の編集方針としてうたっており、教科書の編集方針には出版社による顕著な差異が存在していることも事実である。

今回、分析対象とした1993年度版の教科書は、「差別撤廃条約」批准後の新しい学習指導要領に基づいて作成されており、「差別撤廃条約」では教育における男女平等を基本原則とし、特性論的な考え方を否定している。このような教科書を取り巻く社会状況における変化が、国語の教科書をもつ家族情報にどのような影響を与えているかを、旧学習指導要領に基づいて作成された1989年度版の国語の教科書の家族情報と比較することで明らかにする。

なお、1989年度版の国語の教科書の家族情報、特に家族の属性について分析した結果、「母親と子どもからなる家族が多く、他の家族構成員より多く描かれており、母親と子どもの関係を強調するものになっている」「家族の中に描かれる子どもの記述には顕著な性差はなく、性差は父親と母親の記述に多く認められる」「教科書に描かれる生活は経済的にはニュートラルな記述となっている」などの問題点をもつことが明らかになっている<sup>15,16,17)</sup>。

## 2 分析方法

家族を特定する基準：1989年度版の教科書の分析<sup>18)</sup>と同様の基準で分析した。記述や挿絵に描かれている複数の人間や人間以外のものの間に、夫・妻、親子、きょうだい、祖父母・孫などの関係が認められる場合には、人間以外のものについても家族に関する記述と見做す。

「父の言いつけで妹が、花の種をまく」という単文が例示されている場合、この記述から父親と妹と語り手である年上のきょうだいの3人の間に親子・きょうだいの関係が特定できるため、この単文は家族に関する記述であると見做す。家族の記述がもっと詳細になされ、かつ、挿絵が挿入されるなど、同一家族に関する記述や挿絵が複数ある場合も、家族数は1と見做す。また、「おとうさん」「おかあさん」「おじいさん」「おばあさん」など家族の呼称のみが文字あるいは顔絵に呼称が併記されている場合も、呼称などによって家族の関係が認められる場合は家族と見做す。さらに、同一の題材に異なる家族が複数登場する場合は、すべて別個の家族として扱う。家庭生活に関する記述や挿絵であっても、登場人物が一人の場合には分析対象としない。また、「家族」という用語のみで家族の構成員が特定できない場合も分析対象としない。**分析対象**：分析対象とした教科書は、1991年2月検定済で1993年に6社から出版された小学校1～6年生用の上下巻の計72冊である。家族に関する記述および家族に関する挿絵や写真の全てを分析対象とする。表1は、1989年度版と1993年度版の分析対象とした章数等を示す。

1993年度版では家族に関する記述は、72冊の総章数の57%にあたる351章にみられる。「おおきな かぶ(1年生)」と「ごんぎつね(4年生)」の題材は、全ての出版社で扱われている。このように複数の出版社で題材が重複している場合は、重複している出版社の中で最も高い採択率<sup>19)</sup>をもつ出版社のものを分析対象とし、他の出版社のものは分析対象としない。この手続きにより分析対象から除かれたものは全部で32章あり、結局、分析総章数は319となる。これらに418の家族が登場しており、この418家族を分析対象とする。家族の掲載率は、1年生では上下巻に有意差( $\chi^2=16.326$ ,  $p<.001$ )があるものの、他のいずれの学年においても有意差はなく、上下巻にはほぼ同じ頻度で家族が題材として登場している。1学年と他の学年の間に有意な学年差があり、1学年よりも他の学年の方で家族が多く登場する傾向が認められる。これは、1年生の上巻の家族の登場率が低いことに起因している。また、登場する家族数は、いずれの出版社においても類似の数値を示し、顕著な偏りは認められない。以上の結果を踏まえ、今回は、上下巻別、学年別、出版社別の分析は行わない。

**分析方法**：家族の属性および家族の生活に関する記述を明らかにするために、①家族構成の多様性、②家族の生活が描かれている時代、③家族の生活(健康状態、家族の中の誕生を死、生活水準と生活時間)の3点から分析する。

なお、分析にあたっては、まず、複数の分析者が独自に分析し、ついで分析者の結果を照合

表1. 分析対象および章の家族数 (1989年及び1993年度版)

N (%)

学年	全章の数		分析対象の章の数 (全章に対する比率)		1993年度版の新しい分析対象の章の数と全分析対象章に対する比率	分析対象とした家族数	
	1989	1993	1989	1993		1989	1993
	1年 上巻	72	91	25 (34.7)		24 (26.4)	11 (45.8)
1年 下巻	52	49	25 (48.1)	30 (61.2)	10 (33.3)	36	27
2年 上巻	53	48	23 (43.4)	29 (60.4)	14 (48.2)	34	29
2年 下巻	52	48	28 (53.8)	24 (50.0)	18 (75.7)	33	34
3年 上巻	52	46	26 (50.0)	32 (69.6)	16 (50.0)	40	36
3年 下巻	51	48	32 (62.7)	24 (50.0)	20 (83.3)	42	35
4年 上巻	52	47	23 (44.2)	33 (71.1)	17 (51.5)	32	31
4年 下巻	51	48	24 (47.1)	25 (52.1)	20 (80.0)	33	46
5年 上巻	51	47	27 (52.9)	22 (46.8)	13 (59.0)	44	41
5年 下巻	51	46	23 (45.1)	23 (50.0)	21 (91.3)	34	31
6年 上巻	51	47	27 (52.9)	25 (53.2)	14 (56.0)	47	42
6年 下巻	50	46	27 (54.0)	28 (60.9)	16 (57.1)	37	34
計	638	611	310 (48.6)	319 (52.2)	190 (59.6)	445	418

し、不一致のものについて話し合い、統一を図る。

### 3 結果及び考察

#### (1) 家族数と家族構成の多様性

表1に示したように、1989年度版の教科書と1993年度版の教科書の全学年に記述されている家族数に有意差はない。しかし、学年別に上下巻を比較した場合には4年生の上巻に有意差があり ( $\chi^2=6.783$   $p<.01$ )、1989年度版より1993年度版の教科書に多くの家族が登場している。また、2年生および3年生の上巻においても1993年度版の教科書の方に多くの家族が登場する傾向が見られる ( $\chi^2=3.344$   $p<.1$ ,  $\chi^2=3.768$   $p<.1$ )。このように学年別に見た場合には両年度に差異が多少見られるものの、いずれの年度版においても教科書の中に多くの家族が登場する傾向は共通している。

なお、1993年度版に新しく加わった分析対象の家族の比率は、表1に示したように33.3% (1年生下巻) から83.3% (3年生下巻) に分布し、その平均は約60%である。このことは、1989年度版で家族が登場していた題材の多くが、1993年度版では差し替えられたことを意味している。

つぎに、1993年度版における父親と母親の登場率をみると、父親45.9%、母親60.3%であり、明らかに母親の登場率が高くなっている ( $\chi^2=17.291$   $p<.01$ )。また、祖父母では、祖父16.8%、祖母15.9%と両者の登場率に有意差はない。子どもの登場率は、95.3%となっており、家族の中の子どもの占める比率は非常に高くなっている。

1989年度版と1993年度版における登場率の変化を見ると、母親では68.1%から60.3%に有意

に減少し ( $\chi^2=5.717$   $p<.05$ ), 逆に祖父では7.6%から16.8%に有意に上昇し ( $\chi^2=10.009$   $p<.01$ ), 祖母では8.2%から15.9%に有意に上昇 ( $\chi^2=8.214$   $p<.01$ ) している。しかし, 父親 (46.7%から45.9%) と子ども (97.8%から95.3%) の登場率には有意差はない。

家族構成員の組み合わせについては, 表2に示すように16通りの類型が認められる。「その他」には, 一時的にせよ血縁関係にないものが家族の中に迎え入れられて生活を共有する家族が含まれており, この類型は1989年度版にはなかったものである。1993年度版で高い比率を示したものは, 「母親・子ども」, 「父親・母親・子ども」, 「父親・子ども」からなる家族である。これらの比率を見ると, 「母親・子ども」と「父親・子ども」では前者の比率が有意に高く ( $\chi^2=26.238$   $p<.01$ ), 「母親・子ども」と「父親・母親・子ども」でも前者の比率が有意に高くなっている ( $\chi^2=11.594$   $p<.01$ )。これら3種の家族類型は, 1989年度版では上位3位を占めていたものである。しかし, 個々の比率を比較すると, 「母親・子ども」の比率は1989年度版より1993年度版の方が有意に低く ( $\chi^2=5.124$   $p<.05$ ), 「父親・母親・子ども」の比率も1993年度版の方で減少する傾向を示している ( $\chi^2=3.662$   $p<.1$ )。つまり, 1989年度版の方が1993年度版より「母親」及び「母親・子ども」の関係を強調する家族情報になっている。一方, 1993年度版の方は「母親」, 「母親・子ども」, 「父親・母親・子ども」の比率が1989年度版より有意に減少するとともに, 祖父母の比率が上昇することで, 結果的に教科書に描かれる家族の類型の多様化が生じている。

しかし, この結果は両年度版に基づいた指摘に過ぎず, 基本的には両年度版の教科書は非常に類似した家族情報をもっている。つまり, いずれの年度版の教科書も, 家族の中の母親の存在を強調するとともに, 母親と子どもの関係を重視するものとなっている。

また, 表2からも明らかなように, 血縁関係にある家族の類型の比率が高いことから教科書

表2. 家族構成員の類型 N (%)

	1989年度版	1993年度版
父親・母親・子ども・祖父母	11 ( 2.5)	17 ( 4.1)
父親・母親・子ども・祖父	5 ( 1.1)	9 ( 2.2)
父親・母親・子ども・祖母	6 ( 1.3)	10 ( 2.4)
父親・子ども・祖父	3 ( 0.7)	0 ( 0.0)
母親・子ども・祖父母	1 ( 0.2)	0 ( 0.0)
母親・子ども・祖父	5 ( 1.1)	5 ( 1.2)
母親・子ども・祖母	6 ( 1.3)	5 ( 1.2)
父親・母親・子ども	108 (24.3)	79 (18.9)
父親・子ども	72 (16.9)	60 (14.4)
母親・子ども	161 (36.2)	121 (28.9)
孫・祖父母	4 ( 0.9)	0 ( 0.0)
孫・祖父	5 ( 1.1)	8 ( 1.9)
孫・祖母	6 ( 1.3)	8 ( 1.9)
きょうだいのみ	39 ( 8.8)	40 ( 9.6)
夫・妻	10 ( 2.2)	18 ( 4.3)
上記以外の類型		38 ( 9.0)
計	445	418

では家族を血縁関係による閉鎖的な関係として記述していることが明らかである。しかし、「ぼくとアルベスにいちゃん(大阪2年上巻)」のように家族の中に留学生をホームステイという形で迎え入れるなど、家族を他にに向かってひらかれた関係として描いているものもある。このように家族を他に開かれた関係として扱った題材は、1989年度版には見られないものである。

1989年度版では家族の呼称が固定的で、家族の構成員が家族以外の役割をもつ存在であることがほとんど認められない情報となっている。そのような状況では、それぞれの構成員が個人として対等な関係を結びにくいことの問題を指摘した<sup>20)</sup>。しかし、1993年度版では、「あなたはだれ(光村3年下巻)」のように、呼称の流動性・多重性を正面から扱った題材もある。これは、漫画の主人公である「サザエさん」は呼ぶ人が異なれば、同じ「サザエさん」が別の呼称で呼ばれることを、生活空間の違い、関係の違い等と対応づけて示しているものである。また、この題材は「わたしたちは、いつでも、同時に、たくさんの人とさまざまなつながりの中で生活しています。そして、そのときどきに、人のよび方、よばれ方もかわるものです。」などの記述に見られるように、呼称が関係の中の視点の移動により異なること、さらに、人は同時的に多重な役割を担いながら生きていることを例示しており、評価できる。しかし、この題材のように知識として役割の多重性を理解するだけでなく、登場人物に感情移入しやすい物語や作文等の題材の中で呼称の流動性と役割の多重性を実感できるような題材の選択を考える必要がある。その点については、両年度版に掲載されている「ニキのおかあさん(日本書籍3年生巻)」は評価できる。この題材では主人公ニキは、母親が「母親」以外の役割を担うことに最初は拒否的であったが、働く母親の生き生きした姿を見たり、他者から働く母親の評価を聞くことで、母親が多重な役割を担って生きていることを肯定できるようになるまでの過程が物語の主要部分となっている。これは人間の生き方の多重性という視点から評価できる題材である。しかし、母親が働く前提条件として「家族に迷惑をかけないこと」が課せられるなど、働くことが母親の基本的な権利としてとらえられておらず、家族情報の題材として十分な条件をもっているとは言えない。人間の生き方の多重性を語る時、対等平等の視点が欠落すると、先に見た「ニキのお母さん」のように性別役割を肯定したり、助長する情報となってしまうことの認識が必要であろう。

## (2) 題材の種類と作者について

表3は、題材の種類と作者について見たものである。

1993年度版で分析対象とした家族の約76%は、「作文や詩」及び「物語」の中に登場している。登場率は、「物語」より「作文や詩」の方が有意に高い( $\chi^2=6.554$   $p<.01$ )。この傾向は、1989年度版でも認められものである。多くの教科書分析では、題材の作者が男性に大きく偏ることの問題が指摘されており<sup>21,22)</sup>、家族情報の分析においても子どもの作品が高い率を占める「作文・詩」以外では、男性が作者になる比率が有意に高く、同様の問題が指摘されている<sup>23)</sup>。しかし、1993年度版では「物語」と「作文・詩」の作者には有意な男女差はなく、有意差が認められた題材は「説明・記録文( $\chi^2=17.790$   $p<.01$ )」「その他( $\chi^2=5.760$   $p<.05$ )」であり、分析対象とした題材の作者に関しては、男女差が縮小するなど、改善の方向が伺える。

表 3. 題材の種類と作者

N (%)

	男性		女性		計	
	1989 年版	1993 年版	1989 年版	1993 年版	1989 年版	1993 年版
	物語	65 (59.1)	49 (51.0)	45 (40.9)	47 (49.0)	110 (38.3)
作文・詩	72 (52.9)	62 (49.2)	64 (47.1)	64 (50.8)	136 (47.4)	126 (43.3)
説明・記録文	15 (83.3)	16 (84.2)	3 (16.7)	3 (15.8)	18 (6.3)	19 (6.5)
例題・その他	16 (69.6)	31 (62.0)	7 (30.4)	19 (38.0)	23 (8.0)	50 (17.2)
計	168 (58.5)	158 (54.3)	119 (41.5)	133 (45.7)	287* (100.0)	291* (100.0)

\*作者が無記述あるいは不明のものを除く

### (3) 家族の生活

#### ① 生活が描かれている時代

1993年度版に描かれた家族が生活している時代を見ると、約20%のものは生活している時代情報が不明となっている。家族が生活している時代が明らかな題材についてみると、80.3%は現代であり、戦前・戦中が7.9%、昔々に相応するものが9.4%、その他が2.4%となっている。「現代」の比率が高い理由は、作文が占める比率の高さ(43.3%)に起因している。つまり、作文は読み手である子どもと同じ時間を生きている子どもが自分の生活を見詰めて書いているため、自ずと語られる生活が「現代」となる。1989年度版と比較した場合、1993年度版では戦前・戦中が約10%減少し、昔々が約6%と上昇傾向が認められるが有意ではない。

#### ② 家族の健康状態等

1993年度版に登場する家族構成員の健康状態や障害に関する記述がどのようになされているかについて見る。病気や怪我などの状況にある家族構成員に関する記述を構成員の登場数に対する比率で見ると、父親3例(1.6%)、母親7例(2.8%)、兄1例(1.4%)、姉1例(1.5%)、妹2例(3.2%)、弟5例(6.5%)、男の子1例(0.9%)、女の子6例(6.7%)、祖父1例(1.7%)、祖母2例(3.5%)となる。この中には動物の家族の母親1例、姉1例、男の子1例が含まれている。

病名が明記されているものが約半数あり、それらは風邪、はしか、扁桃腺の手術、歯の治療などである。「入院する」「病気になる」など原因よりも状態として病気が語られるものが多い。しかし、「へんとうせんの手術」(学校図書6年下巻)「はいしゃさん(教育2年下巻)」は、手術や治療を行為として客観的にとらえた記述になっており、病気を「厄介な」こととしてではなく、冷静に受け止める姿勢が顕著に認められる。このような視点をもった題材は、1989年度版には見られないものである。しかし、新しい題材の中には、母親が看病のために勤めをやめるなど、性別役割分担を助長する内容になっている題材もあり、必ずしも評価できないものもある。この観点からの分析は別途計画しているので改めて検討する。

また、障害に関する記述は、子どもについて3例(0.7%)あり、これは1989年度版と全く同

じ題材である。つまり、2例は肢体における障害であり、1例は視覚と聴覚における障害である。教科書の中に障害をもつ人や子どもが家族構成員として登場する頻度は低く、出版社によってはこれらの人々が全く登場しない教科書もある。1989年度版の分析時にも指摘したことであるが、実際の家族の生活はいろいろな状況にある人々を含みつつ展開しており、教科書に描かれている家族の生活は建て前論ではなく、家族構成員の心身の状況がもっと多様なものであることを示す家族情報であることが必要とされよう。

### ③ 家族の中の誕生と死

1993年度版の家族の中に誕生する新しい命の記述は5例(1.2%)あり、1例は人間の家族であり、他は動物に関するものである。また、家族の死に関する記述は33例(7.9%)あり、28例は人間の家族であり、5例は動物の家族に関するものである。死因を見ると、人間の家族の場合は戦争によるものが12例(42.9%)、病気によるものが2例(7.1%)、他は特に明記されていない。動物の場合の3例(60.0%)は人間による殺戮であり、他は特に明記されていない。

家族の死に関する記述をみると、戦争による死は死そのものが物語の主要な事柄として描かれているが、病死による死はさり気なく記述されているものが多い。しかし、「きよならの学校(光村5年上巻)」では、少年が祖父の臨終の場に立ち合い、少年の言葉で死の過程が語られている。死は命あるものの生活の中では避けられない事象でありながらも、語ることが阻まれ、特に、成長が特徴である子どもの目に触れさせないような暗黙の配慮がされている感がある。しかし、この題材では、子どもを家族の死の場に立たせることで、死を身近なこととしてとらえる情報になっている。このような題材は1989年度版には見られなかったものである。動物の死は、読み手の情動に訴える記述となっており、物語の展開の主要な事柄として描かれ、人間の死と動物の死ではその情報の質に大きな差異が見られる。

1989年度版と1993年度版を比較すると、生命誕生に関する題材は27例から5例に、死に関する題材は50例から33例に、いずれも数的には大きな減少を示している。1993年度版については死に関する題材に新しい傾向が見られるものの、全体的には死や生命誕生を含んだ家族情報とはなっていない。人は家族のもとに生まれ、誕生と死は命あるものにとって一続きの事柄であるが、教科書の中では誕生と死を欠いた状況の中で家族の生活は語られる傾向が強い。この傾向は、例数が少ないという点から1993年度版の方でより顕著に認められる。

### ④ 生活水準および家計の担い手と職業

1993年度版の家族の生活水準について言及しているものは、418家族中24家族(5.7%)であり、家族の生活を経済的視点から記述しているものは非常に少ない。なお、24家族の生活水準は、10家族は「貧しい」、9家族は「豊か」、「貧しさから豊か」に変化したものが5家族である。

貧しさに関する記述をみると、「父を早くなくし、家の暮らしは大変苦しいものでした(東京書籍6年上巻)」「貧しい農夫の子(東京書籍4年上巻)」「貧しい羊つかいの少年(光村2年下巻)」など、貧しさを生活現象的にとらえた記述になっており、貧しさは主人公の手に負えないものとして描かれている。一方、「貧しさから豊か」に変化した場合は、「貧しさ」に立ち向かう者と、「偶然」あるいは「善行」に対する報いとして「豊かさ」を与えられた者に2分される。「わらぐつの中の神様(光村5年下巻)」や「アナトル、工場へ行く(光村4年上巻)」の主人公は、自分のもつ技術や知恵を使って「貧しさ」を打開しており、等身大の家族の生活として描かれている。しかし、上記の5.7%の比率が示すように、教科書に描かれる家族は、生活基盤をなす経済的な側面から見た家族情報とはなっていない。この特徴は、1993年度版と1989年



度版のいずれにも認められる傾向である。

つぎに、1993年度版の家族の経済的生活がどのように維持されているかをみるために、家計の担い手とその職業に関する情報について見る。父親が家計の担い手になっている家族は59家族あり、父親が登場する家族の29.1%を占めている。記述されている父親の職業は、会社員(44.1%)、自営(18.6%)、農業(20.3%)、漁業(11.9%)、その他(6.8%)である。母親が家計の担い手になっている家族は27家族あり、母親が登場する家族の10.3%となっている。記述されている母親の職業は、会社員(25.9%)、自営(30.0%)、農業(30.0%)、その他(14.9%)である。母親は家計の担い手としてほとんど見做されず、その職種も家庭との分離が必ずしも明確でない自営や農業に偏っている。この傾向は、先に家族構成の類型で指摘した、家庭における母親を重視する家族情報と同質のものである可能性が示唆される。これらの傾向は、1989年度版の記述と顕著な違いは見られず、いずれの年度版のものも経済的側面や親の就労など生活情動的な記述は少なく、生活臭の無い描き方になっている。

### おわりに

1989年に行われた現行の学習指導要領の改正時の社会的状況は、旧来の改正時とは大きく異なっている。つまり、現行の学習指導要領は、1985年に日本が「女子に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」を批准した後に改正されたということである。この条約には、「社会と家庭における男子の伝統的役割および女子の役割の変革が男女の完全な平等達成に必要であることを認識し……その目的のために、あらゆる形態の差別とそのあらわれを撤廃するために必要な措置をとる(前文)」ことが国の責任として明記されている。この条約の批准後に改正された学習指導要領に基づいて作られた1993年度版の教科書が有する家族情報は、それ以前の学習指導要領に基づいて作られた教科書とどのように異なるかを明らかにするために家族の属性について分析した。

その結果、作者など比較的外面的と考えられるものに関しては、目に見える形の改善が認められる。しかし、家族の中で母親を重視する傾向や母と子の関係を強調する傾向、父親と母親の役割を対比的にとらえたり、親には親以外の生活がないかのような役割固定的なとらえ方が依然として存在し、「差別撤廃条約」批准に伴う抜本的な変化は教科書がもつ家族情報には認められないことが明らかになる。また、家族情報が誕生や死、経済的・生活的な側面を十分にもっていないことが、家族の生活を生活実感のないものにしていく可能性も示唆された。もちろん、教科書がその家族情報を含む人間の生き方に関してどのような情報を提供するかに関する問題は、教師がその題材をどのように子どもに下ろして行くかが大きく関わっており、題材の適否だけで論ずべき問題ではない。また、1つの教科の問題としてではなく、教育全体としてどう補い合っていくかが重要な検討課題といえよう。その意味では、教科書の記述の問題も教育実践との関連から分析する必要がある。

次報では、役割や行動特性などに関する記述についても「差別撤廃条約」批准に伴う改善がどのようになされているかについて検討する予定である。

## 文 献

- 1 佐藤洋子 女の子はつくられる 白石書店 1977
- 2 新潟県高等学校教職員組合 女性の自立をはばむもの—教科書の性差別つを考えるシリーズ女子教育を考える 1990
- 3 国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会 女はこうして作られる—教科書の中の性差別 1981
- 4 国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会 つばさをもがれた女の子—教室の中の性差別 1982
- 5 大瀧ミドリ 家庭科と国語の教科書がもつ家族情報の分析(1)家族の属性 上越教育大学研究紀要 第13巻 第1号 57-68 1993
- 6 伊東良徳他 教科書の中の男女差別 明石書店 1991
- 7 前掲書 5
- 8 前掲書 6
- 9 石森延男 国語六上 創造 光村図書出版株式会社 1989
- 10 今江祥智 教材を超えて読んで、教師も大冒険 朝日新聞 1992.4
- 11 朝日新聞 新しい教科書 消えた『どろんこ祭り』を学問する 朝日新聞 1992.4
- 12 伊東良徳 男女平等へバランスとれた内容に 朝日新聞 1992.4
- 13 出版労連教科書対策委員会 教科書レポート'94 日本出版労働組合連合会 1994
- 14 出版労連教科書対策委員会 教科書レポート'95 日本出版労働組合連合会 1995
- 15 前掲書 5
- 16 大瀧ミドリ 家庭科と国語の教科書がもつ家族情報の分析(2)親と子どもの役割 上越教育大学研究紀要 第14巻 第1号 289-297 1994
- 17 大瀧ミドリ 家庭科と国語の教科書がもつ家族情報の分析(3)親子の行動特性と関係 上越教育大学研究紀要 第14巻 第2号 443-451 1995
- 18 前掲書 5
- 19 出版労連教科書対策委員会 教科書レポート'92 日本出版労働組合連合会 1992
- 20 前掲書 5
- 21 前掲書 1
- 22 前掲書 6
- 23 前掲書 5

## Family Information Analysis Found in Textbooks on Japanese (1) —Family Attributes in 1989 and 1993 Editions—

Midori OTAKI \*

### ABSTRACT

The family information in primary school Japanese language textbooks edited and published in 1993 based on the course of study revised after the ratification of Convention on Elimination of Forms of Discrimination Against Women was compared with the information in previous textbooks, which were published in 1989. The results are as follows :

1. The appearance rate of mother in 1993 textbooks is significantly lower than in the 1989 textbooks and the appearance rate of grandparents is significantly higher.
2. The patternized family structure comparison reveals more diversification in 1993 than in 1989. The appearance rate of mother-child families shows a significant decrease in 1993.
3. There is little difference between the numbers of textbook passages written by males and females in 1993, whereas in 1989 male-written textbook passages outnumbered female-written ones significantly.
4. The descriptions of the domestic economy in the textbooks in both editions are so neutral that they don't appear to be realistic.

---

\* Division of Physical Education, Home Economics and Technology Education :  
Department of Home Economics Education